

ヨーロッパ体験、そして信仰に導かれて…

須賀敦子の生涯と文学に光をあてるとともに、同時代を生きたカトリックゆかりの文学者、哲学者、彫刻家、科学史家、司祭等を取り上げた意欲的評論集。

~~~~~ 目 次 ~~~~~

|                    |                |
|--------------------|----------------|
| 須賀 敦子 (作家)         | カトリック教会への傾斜と反撥 |
| 犬養 道子 (評論家)        | 信徒神学を生きる       |
| 皇后陛下               | へりくだりの詩人       |
| 村上 陽一郎 (東京大学名誉教授)  | 近代科学とカトリシズム    |
| 井上 洋治 (カトリック司祭)    | スコラ神学の拒否       |
| 小川 国夫 (小説家)        | 夢想のカテドラルの彫刻群像  |
| 小野寺 功 (聖泉女子大学名誉教授) | 西田哲学とカトリシズム    |
| 高田 博厚 (彫刻家)        | 運命に逆らわぬ生涯      |
| 芹沢 光治良 (小説家)       | 実証主義者の「神」      |
| 岩下 壮一 (カトリック神学者)   | 対決的カトリシズム      |

著者：神谷 光信 (文芸評論家)

近代日本とキリスト教との関係に取り組み、評論活動を展開。主な著書に、ギリシア正教徒の形而上詩人の生涯を辿った『評伝鷲巣繁男』(小沢書店 1998年刊)がある。

四六判・220頁 定価(本体 3,619円+税)

ISBN978-4-8169-2070-7 2007年11月刊行

# 須賀敦子と9人のレリギオ

## —カトリシズムと昭和の精神史

神谷光信 著

◆ 須賀敦子、没後10年。  
◆ 同時代を生きた9人の知識人とともに、「カトリシズムと昭和の精神史」を考証。

2019.3

お問い合わせは… **日外アソシエーツ 営業局**

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845  
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

|      |     |                                                                        |   |
|------|-----|------------------------------------------------------------------------|---|
| ■貴店名 | 注文書 | 須賀敦子と9人のレリギオ<br>—カトリシズムと昭和の精神史<br>定価(本体3,619円+税) ISBN978-4-8169-2070-7 | 冊 |
|      |     | ■お名前                                                                   |   |

われわれの知る作家須賀敦子が文芸ジャーナリズムに登場したのは、オリベッティの広報誌「スパツイオ」の連載をまとめた『ミラノ 霧の風景』（白水社、一九九〇年）によってである。長かった昭和が終わり、ソヴィエト連邦も崩壊した後のことである。この書物は読書人の間で評判になり、翌年、講談社エッセイ賞、女流文学賞を受賞した。嬉しさよりも、とまどいの方が大きかったのではないかとわたしは想像する。

第二作は書き下ろしの『コルシア書店の仲間たち』（文芸春秋、一九九二年）で、ここで彼女は三十代を生きたコルシア書店を巡る人々について語った。この書物に「神」という言葉は登場しない。人間だけが語られているとあってよい。カトリック左派についても、必要最小限の記述しかなされていない。彼女のまなざしはシニカルと、つて良、ほど教、客観性を見せている。教会当局を脅かしたコルシア書店を回想のだった。人々が感銘したのは、何か運命的なことからであろうとわたしは思う。そのような稀たのであった。

還暦を迎えていたこともあるが、須賀には晩う。だが、ジャーナリズムからの招きは、彼女「エアの宿」（文芸春秋、一九九三年）『トリエステ

## 内容見本

『須賀敦子と9人のレリギオ  
—カトリズムと昭和の精神史』

## 須賀敦子 —カトリック教会への傾斜と反撥

ルの靴』（河出書房新社、一九九六年）と、合わせて五冊の書物を刊行する。  
一九九七年（平成九年）一月、須賀敦子は国立国際医療センターに入院する。退院するが再入院し、翌年三月、心不全により急逝した。六十九歳だった。

駆け足で須賀敦子の生涯を概観したが、紆余曲折に満ちたジグザクの行路に見える彼女の人生も、カトリシズムの視点から眺めたとき、首尾一貫した精神が脈打っていたことが見えてくる。彼女が希求しつづけたものは、修道院とは異なる新しい「共同体」であった。それがどういうものであったのか、考えてみることにしよう。

還暦を過ぎてから文芸ジャーナリズムに迎えられ、作家として晩年を生きた彼女は、死の直前に、ある神父を訪ねた際「私にはもう時間がないけれど、私はこれから宗教と文学について書きたい。それに比べれば、いままでのものはゴミみたい」と語ったという（鈴木敏恵「哀しみは、あのころの喜び」前掲『文藝別冊』所収）。

宗教について、彼女はどのような書き方をしようとしたのだろうか。須賀は自分の体験を通してしか、要するに、生活の次元、肉体的な次元にまで降りてきた思想しか語ろうとしなかった人であるから、宗教についてもそれは同様であったろう。彼女の書物に「神」という語彙がほとんど登場しないことはすでに記したとおりである。それは日本の読者を意識したから、と